

ネットメロン6果どりのための摘心位置と着果節位の検討

東北農林専門職大学附属農林大学校 野菜・花き経営学科 野菜コース 大久保 達希

みどり戦略との関連性

気候変動に適応したネットメロンの生産性向上技術

課題設定の理由

私の住んでいる新庄市は、トマトやきゅうり等の果菜類の栽培が盛んである。その反面、ネットメロンやすいかの栽培は活発に行われておらず、産直で販売されているものは他地域で栽培されたものである。そこで生産量を増やすため6果どり栽培を行い収量の増加を目指す。そのため6果どりを可能にする摘心位置と着果節位の検討を行う。

試験方法



図1 園場の様子（7月16日）

- 6果どりは摘心位置を30葉（30葉摘心区）と35葉（35葉摘心区）で行い、着果節位は13節～15節とした。
- 慣行区は摘心位置を25葉で行い、着果節位は11節～13節とした。
- 供試品種「アンデス1号」

試験結果

- 着果数は、慣行区と比較して6果どりを行った2区が多くなった。（表1）
- 果重は、6果どりを行った区がやや重くなったもののほとんど差は見られなかった。（表1）
- 糖度は、6果どりの両区で出荷基準の14° Brixを下回った。（表1）
- 商品化収量は、慣行区が最も多くなった。（図2）

表1 収穫時調査（8月12日） 5株平均

試験区	果径		着果数 (個/株)	果重 (kg)	糖度 (° Brix)
	たて (mm)	よこ (mm)			
30葉摘心区	146.0	140.2	5.2	1.5	13.8
35葉摘心区	142.4	137.3	5.2	1.5	13.9
慣行区（25葉摘心）	142.2	127.3	4.0	1.4	14.1

※30葉、35葉摘心区6果どり、慣行区4果どり

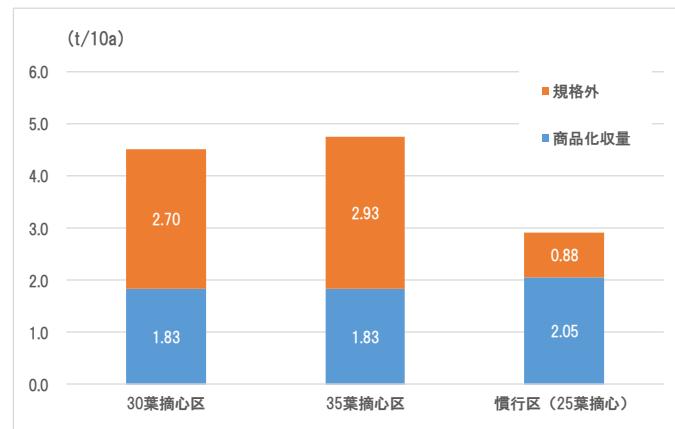


図2 収量

- 30葉摘心区と35葉摘心区は6果どりを行なったことで、収量は増加したが1株の中で果実ごとの糖度にはばらつきがあり、出荷基準糖度である14° Brixにやや届かない果実が多く規格外の割合が増加した。
- 30葉摘心区と35葉摘心区は、葉数を増やしたことでの茎葉が込み合い慣行区と比較するところの整理等の作業性が落ちてしまう。その対策として、地這い栽培+つる上げを組み合わせた栽培方法が有効と考えられる。
- 6果どりの両区は、着果後日数を見て収穫を行なったことで、葉の苦土欠乏があまり見られない状態で収穫したため凍土が出荷基準にやや届かない果実が多くなった。そのため、今後の対策として葉が黄化し枯れてから収穫することや、試し割りの段階で着果節位ごとの糖度のばらつきを見ておく等が考えられる。

※参考文献等：トンネル早熟栽培におけるアンデス5号を用いた5果どり栽培
(山形県庄内総合支庁農業技術普及課産地研究室)